大阪赤十字病院

# 国内外の救援活動 2019

## 国際医療救援部

Japanese Red Cross Osaka Hospital International Medical Relief Department

日本赤十字社 Japanese Red Cross Society　大阪赤十字病院

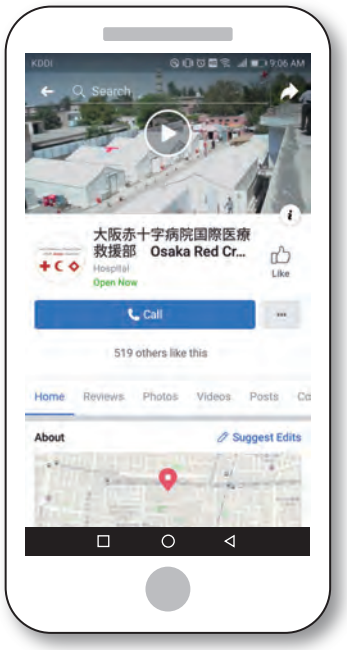
人間を救うのは、人間だ。Our world. Your move.

# IMR Story

## まずは知ることから。いつでも、どこからでも。

## Find Us On-Line!

**大阪赤十字病院　公式ホームページ**
国際活動の報告書などを掲載




**フェイスブック**
最新の現地情報を写真や動画で

検索

大阪赤十字病院　国際医療救援部

# 2018年度の取り組みと2019年度の展望

2018年は「今年の漢字」に「災」が選ばれたほど、国内で大きな災害が相次いだ年でした。わずか2カ月の間に2つの災害に緊急医療チームを出したのは当院で初めてのことです。大阪府北部地震では本院自体も影響を受け、災害対策を見直すきっかけともなりました。

海外では難民支援に取り組む1年となりました。まずは一昨年から続くバングラデシュ南部に流れ込んだ約80万人のミャンマーからの避難民への医療支援です。未だ解決の糸口が見えず、当初のフィールドホスピタルやフィールドクリニックでの緊急医療救援から、現地の医療体制を支援する保健医療支援へとわれわれの支援形態も変えながら、2019年も継続していきます。

新たに始まった事業もあります。レバノンでのパレスチナ難民への医療支援と、シリア難民への子どもたちへの教育支援プロジェクトです。難民問題は自然災害とは異なり複雑な背景があるため、短期間で解決することは困難で、2019年もより良い支援とは何かを常に考えながら活動してまいりたいと思います。

引き続き、皆さまのご理解、ご支援をよろしくお願い申し上げます。

大阪赤十字病院 国際医療救援部　中出 雅治

# バングラデシュ・コックスバザール ～先の見えない

2017年8月25日にミャンマー・ラカイン州で発生した暴力行為を逃れ、隣国バングラデシュに避難した人々の数は80万人以上にのぼり、アジアで最大の人道危機となっています。避難民の人々を取り巻く環境はいまだ厳しく、先行きは不透明です。

日本赤十字社は、現地のバングラデシュ赤新月社※とともに、保健医療サービスを提供しています。

※イスラム圏の赤十字社

## ■避難民のレジリエンスを向上し、災害対応能力を高める。

われわれがバングラデシュの避難民キャンプで運営する診療所は、現在も地域の中核医療施設として機能しており、ここを拠点として、地域保健活動を行っています。自然災害が多いバングラデシュにおいて、避難民自身の防災や減災への対応能力を向上させるため、災害時リスクの把握、応急手当、病気の予防方法を普及しています。

## ■質の高い医療サービスを提供する。

ノルウェーとフィンランドの赤十字社が運営するフィールドホスピタルは、緊急手術や産科合併症に24時間対応可能な医療機関として重要な役割を担っています。当院の医師、看護師、薬剤師らが各国赤十字社から派遣された医療職とともに活動を行いました。

**緊急救援**

2017年9月
↓
2018年4月

●緊急フェーズにおける当院からの派遣者

| | |
|---|---|
| 医師 | 2 |
| 看護師 | 2 |
| 薬剤師（メディカルロジスティシャン） | 4 |
| 臨床検査技師（チームリーダー） | 2 |
| 臨床工学技士（技術要員） | 1 |
| 事務（管理要員、ロジスティシャン） | 5 |
| 合計 | 16 |

※2017年9月～2018年4月

**中長期保健医療支援**

2018年5月➡

●中長期フェーズにおける当院からの派遣者

| | |
|---|---|
| 医師 | 1 |
| 看護師 | 2 |
| 助産師 | 1 |
| 薬剤師（メディカルロジスティシャン） | 2 |
| 臨床検査技師（プロジェクトマネジャー） | 1 |
| 臨床工学技士（技術要員） | 1 |
| 事務（管理要員、ロジスティシャン） | 1 |
| 合計 | 9 |

※2018年5月～2019年3月

**技術要員** 2019年2月

急ピッチで進む日赤診療所の改築工事を指揮する臨床工学技士

**管理要員** 2019年1月～2月

現地職員との面談、物資調達の打ち合わせを行う

**医師** 2018年12月～19年1月

緊急開腹手術に麻酔科医として参加する当院医師

# 避難民の苦難に寄り添う赤十字～

## International Relief Operations

大阪赤十字病院は現地に職員を派遣して、避難民支援を継続しています。

**看護師** 2018年4月～5月

外傷のある患児の創傷処置の様子

**看護師** 2018年7月～8月

地域保健事業の運営について
現地職員と打ち合わせを行う

**薬剤師・メディカルロジスティシャン** 2018年8月

薬局担当の避難民ボランティアに
薬剤の適正使用を指導する

**助産師** 2018年8月～10月

現地の産婆に危険な妊娠の
兆候について指導する

**プロジェクトマネジャー** 2018年10月

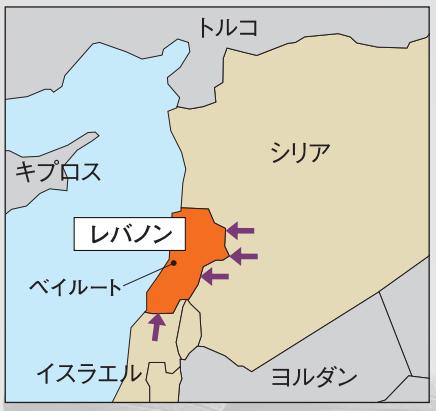
避難民代表者、宗教指導者らと情報を
共有し、事業運営のアドバイスを求める

**薬剤師・メディカルロジスティシャン** 2018年11月

現地製薬会社から医薬品を受領。
品目や数量、使用期限の確認を行う

▶国際赤十字では、政治的・民族的背景および避難されている方々の多様性に配慮し、『ロヒンギャ』という表現を使用しないこととしています。

# 中東難民支援3事業（レバノン）




2015年より日本赤十字社は、中東各国で支援事業を重点的に行ってきました。

なかでもレバノンは、人口400～500万人に対して、合計150万人ものパレスチナ難民、シリア難民が流入しており、この結果パレスチナ難民、シリア難民のみならずレバノン人にも影響が出ています。（左図）

パレスチナ赤新月社ハイファ病院

大阪赤十字病院では、これらの人々を支援する3つのプロジェクトに貢献しています。

## 1 シリア難民、レバノン人の子どもたちの教育支援 ～みらいぷらりぃ～ 管理要員

国際ソロプチミストアメリカ・日本中央リジョン様から当院国際医療救援部に託されたご寄付をもとに、2018年4月から開始したプロジェクトです。

シリア難民の子どもたちが学ぶ場所や機会がないため、レバノンでは300以上の学校を午前午後の二部制とし、午前にレバノンの子どもたち、午後にシリア難民の子どもたちへ授業を行っています。

これらの学校のいくつかは設備が不十分であるため、講堂を改修したり、図書館の整備をして子どもたちが安全に学べるようにしたりという支援を行っています。2018年は3校を支援して設備を整えました。

| アル・コベー校 | アル・ハシャビー校 | アル・マサカン校 |
|---|---|---|
| 講堂に舞台設置 | 図書館改修 | 講堂新築 |

## 2 パレスチナ難民キャンプでの病院技術協力支援 医師2名・看護師・管理要員

レバノン国内には12のパレスチナ難民キャンプがあり、キャンプ内あるいはキャンプに隣接して彼らの病院が5つあります。医師、看護師もほとんどがパレスチナ人ですが、医療技術や知識の更新をすることが困難で、特にこの15年から20年ほどの間、空白期間があります。2018年4月より、継続的に医師、看護師を派遣して病院スタッフとともに医療の質の向上を目指しています。

当院は職員を派遣するとともに、日本国内でのテクニカルサポートを担当しています。

## 3 シリア難民と周辺地区住民への水とトイレ支援 管理要員

レバノン国内には2,000以上のシリア難民キャンプ（非公式居住区）がありますが、多くが岩と砂しかないベカー高原にあり、今も人々がテント生活をしています。当初は国連機関が数十家族に1つずつ水タンクとトイレの設置を行いましたが、長年の使用でメンテナンスもされずに壊れているものが多くなっています。そこでわれわれは、新たに1家族に1つずつ水タンクとトイレを設置するというプロジェクトを開始しました。これによってキャンプの住民が自分のものという意識を持ち、きちんとメンテナンスをすることが期待されます。また、子どもや女性が夜、遠いトイレに行く必要がなくなり、安全と尊厳が確保されています。

## フィリピン北部地域保健衛生事業　フィリピン・セブ　看護師

2013年11月にフィリピン中部を直撃した台風ハイヤンにより、セブ北部も多大な被害を受けました。日本赤十字社は発災直後からの緊急医療支援、その後、住宅再建、生計向上支援、地域保健などの復興支援を行い、2017年1月から同地区にてフィリピン赤十字社とともに地域保健衛生事業を行っています。この事業に当院の看護師を2018年7月から半年間派遣しました。

フィリピンでは近年、高血圧、糖尿病といった生活習慣病が増加傾向にあり、心疾患や血管系疾患は同国での死因上位となる一方、下痢や肺炎などの感染症も多く認めます。本事業は、まず地域保健ボランティアを育成し、彼らによる健康教育を通して地域の人々が病気を予防する知識を身に付け、地域の健康状態が向上することを目指しています。小学校では「水と衛生委員会」を設立し、感染症の予防等に関して委員である児童が啓蒙活動を行います。子どもたちが正しい衛生習慣について学ぶことは、自らの健康を守るだけでなく、家族や周囲の人々へ伝えることで、地域の人々が衛生習慣を見直すきっかけにもなります。

地域保健ボランティアへ
健康教育についてトレーニング

ボランティアが地域住民に
健康教育を行う

フィリピンでは台風や大雨による自然災害が毎年のようにあり、離島などの地方では医療施設へのアクセスは決してよくはありません。健康や保健衛生の問題への取り組みは大きな病気の予防につながるだけでなく、被災した際に感染症やほかの疾患を予防する上でも重要です。保健衛生活動が地域に根付き、地域の人々の保健衛生への意識が高まり、健康状態が改善していくことを願っています。

## インドネシア・スラウェシ島地震救援事業　インドネシア・スラウェシ島　看護師

インドネシアのスラウェシ島で2018年9月26日に最大震度M7.5の地震が発生し、津波と液状化現象により2,000人以上の方が亡くなりました。多くの住民が家屋を失い、余震などにおびえながらテントなどでの避難生活を余儀なくされました。インドネシア政府は、海外からの支援物資は受け入れるが、外国人や国際NGOがインドネシア国内で活動を行うことを極力制限し、外国人の医療従事者が直接被災者などに対して診療やケアを行うことは認めていませんでした。国際赤十字赤新月社連盟は活動を許可された数少ない団体であり、当院から看護師1名を10月から1カ月間派遣しました。

クリニックで状況の説明を受ける

津波と地震で破壊され、半分浸水したモスク

トンペという町にある診療所が液状化により使用不能となり、インドネシア赤十字は以前に寄付された基礎保健緊急対応ユニット（BHC-ERU）を用いて医療活動を行うことにしましたが、初めての経験だったため日本赤十字社のサポートが必要でした。テントの設置場所やクリニックのレイアウトへの助言、プライマリヘルスケアセンターのスタッフとの連携、雨季に備えたキャンプの管理・運営など、支援内容は多岐に渡りました。

健康教育で参加者の興味を引く現地スタッフのテクニックは、
経験と知識に裏づけされたもの

インドネシアは日本と同様、地震や台風などによる被害が頻発する災害大国ですが、アジアでは多くの国々が急激に発展してきており、自分たちで災害に対応できるようなってきています。医療チームを派遣して医療活動を行うという支援だけではなく、平時に研修や訓練を行い、人材を育成することは、われわれがこれから行うことができる支援のひとつであると感じます。

# 海外スタディツアー ヨルダン

あなたも国際救援活動に参加したいと思ったことはありませんか。
“百聞は一見に如かず”という言葉の通り、支援の現場を見て、
地域で活躍するボランティアさんや受益者の方々に会ってみませんか。
大阪赤十字病院では、広く日赤内外の若手職員を対象に、当院シニアスタッフが引率して
海外救援の場を訪れるスタディツアーを2015年から開催しています。
国際協力を目指す若手職員が事業地を訪問し、見て学ぶことで
活動参加への動機づけやキャリア設計につながることを目指しています。
2018年度はヨルダンを訪問―。日赤内外の医師・看護師・事務職員からなる参加者6名は、
全10日間のフィールド学習を通して、貴重な出会いとたくさんの忘れられない体験を
得ることができました。
国際連合パレスチナ難民救済事業機関（UNRWA）のご協力を得て、
赤十字・赤新月社以外の事業を見学させていただくこともできました。

UNRWAが運営するクリニックを見学

ボランティアさんとともに
小学校での啓蒙活動に参加

ヨルダンの街中を歩きながら
コミュニティアセスメント

ヨルダンの遺跡やモスクを訪問

シリア難民の方々へのインタビュー

シリア危機以降、多くのシリア難民がヨルダンに流入し、そのことでヨルダンに元から暮らす脆弱な立場の人々にも影響が出ています。それに対して国際赤十字赤新月社連盟とヨルダン赤新月社は、ヨルダン人・シリア難民両方を対象とした地域住民参加型の保健事業を行っています。現地要員の案内をうけて支援の現場を見学しました。

また、地域で活動するヨルダン赤新月社ボランティアの方々の協力を得て、参加者の皆さんが実際にヨルダンに暮らすシリア難民の方を家庭訪問してインタビューをしたり、街中を歩きながらコミュニティアセスメントを行ったりすることもできました。想像を超える難民の方々の厳しい生活状況に、参加者の皆さんも涙をこらえながらインタビューをしていたのが印象的でした。

見学やコミュニアセスメントで情報を得た後は、受益者の方のニーズと赤十字としてどんな支援ができるか、グループワークを通して議論しました。現地要員からも人道支援の現場で働く上で求められる視点や地域保健衛生における知識を教えていただき、参加者の皆さんからは、「日本に帰りたくない」「受益者の人たちのためにがんばりたい」「国際救援要員を本気で目指したい」などのフィードバックをいただき、とてもよい旅となりました。

▶2019年は、6月頃に当院ホームページや国際医療救援部公式フェイスブックなどで参加者募集を行います。

# 大阪赤十字病院の国内災害

災

2018年「今年の漢字」

## 大規模災害への救護活動

平成30年、大阪府北部地震、西日本豪雨、大型台風、北海道胆振東部地震など、日本各地で大規模な自然災害が発生しました。

6月18日（月）に発生した大阪府北部地震では、初日から国際医療救援部職員が大阪府庁災害対策本部に詰めるとともに、医療救護班を茨木市に3日間、その後こころのケア要員を含め延べ43名の職員を派遣しました。

7月に入り記録的な豪雨により、甚大な被害が発生した岡山県倉敷市真備町に、7月12日（木）から15日（日）および7月21日（土）から24日（火）まで延べ21人、計2班の医療救護班を派遣しました。

# 大阪府北部地震

### ■避難所の環境調査など 発災当日からの活動

平成30年6月18日午前7時58分、大阪府北部を震源としたマグニチュード6.1の地震が発生。最大震度6弱を大阪府大阪市北区・茨木市・高槻市・枚方市・箕面市の5市区で観測し、大阪赤十字病院がある大阪市天王寺区も震度4を観測しました。当院でも一時エレベーターが停止するなど、緊迫した状況が発生しました。

今回の派遣は、東日本大震災や熊本地震とは異なり、医療活動ではなく、避難所アセスメントが主な活動となりました。避難所巡回は茨木市の保健師さんと協力して行い、避難所の環境を調査し、また避難されている方々や避難所を管理されている方から話を伺いました。

北部地震の爪跡

また、発災直後より大阪府庁内に災害対策本部が立ち上がりました。当日は府庁職員はもちろん、消防、警察、自衛隊など多くの関係機関や近県の応援部隊も来庁し、相当数が詰めていました。当院からは発災当日から毎日2名ずつ国際医療救援部職員が本部に入り、発災当日の当院救護班の派遣先の決定や、現場で活動する救護班からの情報を本部に集約する作業、行政・医師会・保健所・他の支援団体と支援内容の調整などを行いました。

茨木市職員と避難所アセスメントを実施

発災当日の災害対策本部医療ブース

発災直後、災害対策本部に多数の防災機関が集結

# への取り組み

## 平成30年7月豪雨

### ■医療救護班を派遣 被災者、ボランティアさんを救護

平成30年の台風第7号および梅雨前線などに伴う記録的な豪雨により、西日本を中心に甚大な被害が発生しました。当院が医療救護班を派遣した岡山県倉敷市真備町では、7月7日朝までに小田川と支流の高馬川などの堤防が決壊し、広範囲が冠水しました。

豪雨の爪跡が残る高梁川

被害の大きかった真備町の岡田小学校では、避難する人々の数が、夜間になると昼間の倍の700名前後に増加していたことから、午後8時までの夜間診療を行いました。

被災した家屋の片付けなどで起こる擦過傷や切り傷、皮膚炎などのほか、長期化した避難生活のため疲労がピークに達し、猛暑により体調を崩された患者さんが多く受診されました。

また、現地で活動するボランティアさんたちの熱中症に対する救護活動も行いました。

街中にはいたるところに瓦礫の山、浸水の爪跡が残る

瓦礫の撤去で負傷した被災者の治療にあたる当院医師

熱中症で倒れた被災者のケアをする当院看護師

### 被災地に派遣された救護員の声　悩み、もがき、そして成長する救護員たち

●テレビから得る情報とは異なる点があると、現場を見て思った。医療ニーズは少ないながらも、避難所に行くと、「日赤が来てくれて安心した」と言われた。それだけ日赤に対して信頼があることを感じた。

●救護員として活動し、看護師として行政や地域との連携の大切さを学んだ。

●限られた資源の中でどのように工夫するかというアイデア性がなく、判断力が弱いと思った。被災者への心のケアとして、声かけをどうしたらいいのか悩んだ。

●地域の方々による医療体制の復旧を考慮し、地元医療機関の再開に伴う課題について、ともに協議し、バックアップすることが救護班の役割であることを改めて実感した。

●災害派遣要員として初めて出動し、話についていくのがやっとで、なかなか考えが追いついていかないところがあった。この状況から今できることは何なのか、アセスメントが難しかった。

●調整員として、迅速かつ適切な判断が求められる中で、変化していく活動内容とチームメンバーを調整することは非常に難しかった。

●車の運転を行った。普段運転しない大きな車なので、バックや方向転換、狭い道を走るときなど、注意しながら運転した。

## 親と子の防災体験セミナー

# 災育

SAIIKU

## 災育（さいいく）とは

災害が起こったとき、消防や警察などの公的機関はすぐに駆けつけることが困難です。

また病院にも多くの人が駆けつけることで、その機能がパンクしてしまいます。そこで、自分の命は自分で守る、そしてその上で、家族や周りの人たちを助けることができる「自助・共助」の芽を地域に育みたい。そういった思いで当院で毎年開催している防災体験型のイベントです。

大阪府北部地震、豪雨災害と西日本を中心に甚大な被害が発生した直後の開催となった今年で9年目となる「災育」。過去最高の申込みがあり、住民の方々の防災意識が高まる中、当日は255家族、611名が参加されました。趣旨に賛同し参加してくださっている防災関係機関や企業の方々も、災害対応に尽力されている中で、住民の方々の期待に応えるべく被災地での活動の様子などを数多く展示してくださいました。また運営する側も病院職員、看護学生など併せて200名を越えるスタッフが参加し、今年も盛況のうちに終了しました。

富田林市での防災イベントにも協力しました。各地で災育の芽が花開くことを願っています。

2019年の「災育」は8月4日（日）に開催予定です。詳細は2019年6月中旬以降にホームページや大阪赤十字病院国際医療救援部公式フェイスブックでお知らせいたします！

# 研修・勉強会

## どなたでも無料で参加できます!

当院では、国内・海外支援のための勉強会や研修会を、1年を通して行っています。勉強会の多くは院外の方でも受講することができます。

テーマは、紛争地での看護の実際などのディープな内容から、被災地での資材の運搬や保管に関するもの、国内災害で発電機を扱う際に必要な知識と実技演習など、多岐にわたります。

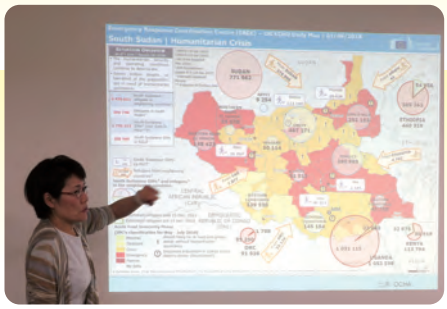
▶勉強会の開催については、国際医療救援部のフェイスブックで案内しています。

海外支援ってなんだろう?

電気工事士への途

被災地でのロジスティクス

南スーダンでの戦傷外科看護



災害時の診療情報システム

1泊2日の国際活動体験ツアー

年に2回、春と秋に
緊急救援を1泊2日で
出国から帰国までを
国内でシミュレーションをする
国際活動体験ツアーを
開催しています。

# 国際医療救援部とロジスティクスセンター

大阪赤十字病院の、国内外の災害・紛争に対応する国際医療救援部と、災害専用の倉庫であるロジスティクスセンターは、他の病院にはない部署、施設であるため、毎年国内外から多くの方々が見学に来られます。2018年はこんな方々が来られました。

吹田市の赤十字奉仕団の方々

タイ、ネパール、クック諸島の青少年ボランティアたち

韓国赤十字病院の院長

防災に興味がある大学生

ケニアからの研修生

全国赤十字施設に就職予定の学生たち

# もっと世界を伝えたい

大阪赤十字病院国際医療救援部

Japanese Red Cross Osaka Hospital International Medical Relief Department

本院の国内外の活動を日々アップしています。

大阪赤十字病院国際医療救援部
公式フェイスブック


大阪赤十字病院　国際医療救援部

〒543-8555　大阪市天王寺区筆ケ崎町5-30

TEL: 06-6774-5111（代表）　FAX: 06-6774-5131（代表）

http://www.osaka-med.jrc.or.jp/aboutus/international/index.html


2019年3月発行